

『硝子戸の中』 夏目漱石

【テーマ】

〈本棚拝見(リクエスト特集)〉

【本】

『硝子戸の中』 夏目漱石 (岩波文庫)

初出:『朝日新聞』1915年(大正4年)1月13日~2月23日(全39回)

初刊:『硝子戸の中』1915年(大正4年)4月 岩波書店

【夏目漱石 (なつめ そうせき)】

1867年2月9日(慶応3年1月5日) - 1916年(大正5年)12月9日は、日本の小説家、評論家、英文学者。本名、夏目 金之助(なつめ きんのすけ)。江戸の牛込馬場下横町(現在の東京都新宿区喜久井町)出身。俳号は愚陀仏。

大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学(後の東京帝国大学、現在の東京大学)英文科卒業後、松山で愛媛県尋常中学校教師、熊本で第五高等学校教授などを務めた後、イギリスへ留学。帰国後、東京帝国大学講師として英文学を講じながら、「吾輩は猫である」を雑誌『ホトギス』に発表。これが評判になり「坊っちゃん」「倫敦塔」などを書く。

その後朝日新聞社に職業作家として入社し、「虞美人草」「三四郎」などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。「修善寺の大患」後は、『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』などを執筆。「則天去私(そくてんきょし)」の境地に達したといわれる。1916年12月9日、「明暗」の連載途中で胃潰瘍で永眠。享年50歳であった。

【ストーリー】

『こゝろ』と『道草』の間に書かれた夏目漱石最後の随筆。

ガラス戸で世間ときられた書齋で、単調な生活を送っている作者のもとに時々人が入ってくる。それらの自分以外にあまり関係ないつまらぬことを書くと同置きして、身辺の人々のことや思い出が綴られる。自分が飼ったヘクターと名づけた犬の死の話。身上話を漱石に小説にしてもらいたがった女の話。旧友O(太田達人)の訪問と短い交流の話。画を送ってきて賛を強要する男の話などから始められ、後半は漱石の若い時代の思い出の話が主となる。

【推薦者からのコメント】 ※推薦者「本間さん」より

今年は夏目漱石没後100年に当たる年です。漱石は国民的作家とも言われ、これほどまでの長い間、実際に日本・日本人に影響を与え続けてきた稀有な作家です。(一方で、この100年、日本と日本人はどうであったのか、どう変わり、どう変わらないできたかは興味あるテーマです。)

それはさておき、『硝子戸の中』は漱石が48歳頃の随筆であり、その一生が身体面でも精神面でも病んでいることが多かった漱石にとっては、比較的穏やかな日々の中で書かれた作品です。この静かで、落ち着いた漱石も、漱石らしさが滲み出ている、私はとても好きです。

『虞美人草』以降の小説と同様に朝日新聞に毎日掲載されたものであり、我々も毎日1章ずつ読んでいくと当時の読者とある程度同じ感覚を味わうことができます。この『硝子戸の中』は、あの有名な『心』と自伝的小説である『道草』との間に書かれました。漱石はこの約2年後に50歳になる前に亡くなってしまったということも後世の我々は知っています。

『硝子戸の中』は1915年(大正4年)の1月から2月にかけて掲載されました。前年には第一次世界大戦が始まっています。このように100年以上前の随筆ですので、現代の若い人からすると古色然とした内容に思うかもしれませんが、しかし、じっくり読むと、100年前にもかかわらず現代に通ずる変わらない人間味というものを感じると思います。

【お題】作品を読んで次の問いについて考えてみましょう ※推薦者「本間さん」より

1): 26話の内、どの話が最も面白かったかを教えてください(面白かった箇所を朗読してもらってもいいです)。また、どうして面白かったかを教えてください。発表できる人から一人ずつ話してもらいます。その話について、他の人からのコメントをもらいます。

- 三十三章(「世の中に住む人間の一人として」で始まる文章) この話を読んだ時「あーこういうことを考えてしまう人が書いた小説だから、私は漱石の小説を面白いと思うんじゃないかな」と思いました。この話は日々の出来事とか昔のこととかは全然書かれていなくて、答えの出ないことがつらつら書いてあって随筆っぽくない(と私は感じた)のも「漱石先生何かあったのか?これを書かずにはいられなかったのか?」と気になって面白いです。
- 三十三章。今と当時の違いを感じない、古びない内容だと思う。書いてあることが“ちゃんと”わかった。「お人好」と「すれからし」の両極端の間で揺れ惑い、どうバランスをとったらいいのかという疑問には共感できた。書かれている問題意識を最後まで実感として理解できる。
- 二十六章。益さんをからかうところがユーモラスで明るさもある。イジメとも捉えられそうだが、たどたどしい拙さ、滑稽さがあって深刻な雰囲気には陥っていない。「英語できる?」「大丈夫」なんていうやりとりは、現代でもごく自然なことで、だからこそ面白い。ラストの急な付き放し感も印象的。
- 十六-十七章。短編小説のような切れ味。背筋が凍るような怖さもある。亡くなったひとが異常に多いなあという感じ。とくに親戚筋や近所の人なのに生死不明な人がいるのが不気味になっている。世間の底知れなさというか。東京の広さを、どんな風感じていたのか(現代とはどんな差異があるか)。
- 三十九章。春の描写がきれい。ハッピーエンド。冬から春は季節の変化がダイナミックでそれをよく感じられる。部屋を出て、家族や庭の静物との交流があって、にぎやかさが増す。

- 六-八章。「そんなら死なずに生きてらっしゃい」。死とは何か、生とは何か、という難しいことではなく、かといって単なる共感とも異なる、一步踏み込んだものを示しているような気がする。気高さや美など。八章の冷静さを反芻させる。

2):全体を通しての感想を話してください。発表できる人から一人ずつ話してもらいます。他の人からのコメントをもらいます。

- 漱石が随筆を書いていたことを知らなかったのと、なんとなく「漱石は気難しくて随筆とか書かなさそう」なイメージを勝手に持っていたので、課題本を知って少しびっくりしました。読み始めは言葉遣いとかが取っ付きづらくて読みづらかったですが、慣れてきたらスルスル読めて、お気に入りの話もいくつかありました。突然訪ねてくる人にも意外と会ってくれるんだな〜とわかったので、私も会いに行きたくなりました(笑)漱石と哲学対話をしたい!
- 漱石の随筆は初めて読んだ。新聞連載していたにしては、ずいぶんと重いテーマ、内容だなと思う。
- 昔(作品当時の)風景を見てみたい。昔の都内、今とはだいぶ違うんだろなと思うと、気になる。景色や風景は異なるだろうが、では情緒なんかはどうだろうか。同じか?違っていたのか?どこがどう違うか知りたい。
- 都心の幹線道路が土だったんだなと改めて。芝居にでかけるのが丸一日がかりだっていうのが驚きだった。都内の移動なのに。
- 終章で漱石は書齋(硝子戸の中)から出てくるが、その解放(?)への契機がなんであったのかが気になる。季節がめぐるのもその一つだろうが、たぶん随筆に飽きて本格的な創作(小説)が書きたくなった、というようなこともあるのではないか。
- 執筆時の漱石は四十八歳にしては年寄りかいと感じる。彼の特徴として「個人主義」、つまり自分の考えや感情を大事に信じぬくという美点があるが、名を成した立派な人物であるにも関わらず市井のひとに向き合う様子からも、彼が終生個人的な人間関係や付き合いに振り回されていたこともうかがい知ることができる。そういう随筆としても興味深い一冊。

朝さろん 2016 年のスケジュール <http://salon-public.com/archives/category/033>

◇朝さろん#59: 5月12日(木) 7:00-8:00 /アマザワさん

『沈黙』遠藤周作(新潮文庫)

◇朝さろん#60: 6月12日(日) 9:00-12:00 /セリンジャー

『skmt 坂本龍一とは誰か』坂本龍一、後藤繁雄(ちくま文庫)

※本書は、『skmt』(リトル・モア社,1999)と、『skmt2』(NTT 出版,2006)を合本したものです

【解題】 『硝子戸の中』という作品について

- 『ころ』・・・漱石が乃木希典の殉死に影響を受け執筆した作品である。後期三部作とされる前作『彼岸過迄』『行人』と同様に、人間の深いところにあるエゴイズムと、人間としての倫理観との葛藤が表現されている。明治天皇の崩御、乃木大将の殉死に象徴される時代の変化によって、「明治の精神」が批判されることを予測した漱石は、大正という新しい時代を生きるために「先生」を「明治の精神」に殉死させる。結末部で、「先生」の手紙には謎に包まれた彼の過去が綴られていた。「K」や「お嬢さん」との関係とその顛末、「先生」が「私」に語った謎めいた言葉たちの真相が明かされる。



『硝子戸の中』という作品は、次作『道草』と絶筆『明暗』を書き継ぐ旺盛な創作活動のさなかに書かれた随筆である。であればこそ、一見、陰鬱で死の影の漂う閉塞的な本作にあって、どこかに、漱石に新たな創作を促す何か宿っている筈だろう。それは、いったいなんだろうか？

前作『ころ』で全面的に扱った「死」という主題、明治から大正へと時代が遷ることによって不可避免的に想起される「思い出」、そして K という「他者」の存在。これら「死」「思い出(過去)」「他者」というモチーフについて、漱石自身が自分の身の上のこととして、内省的に振り返るような内容になっている。

漱石にとっての「死」、漱石自身の「思い出(過去)」、漱石にとっての「他者」とはなんであったか――。ひとつひとつ、記憶の襞を掘り起こすように、既に喪われた(≒死んだ)かつての自分や家族、周囲にいた人物たちを素描していく。

こうして振り返られた自身の過去が、次作『道草』における自伝的(私小説風)小説という構成へとつながっていく。この作品で漱石は、自分という人間の成り立ち(過去)について、自伝風の形式を借りながらも半ば創作的に語り直すことを通じて見つめなおしていく。作品の主人公は留学から帰って大学教師となる。実際、漱石も英国留学後は大学教師になる予定であったが、漱石はそれを選ばず、職業作家として身を立てることを選んだ。その点でも『道草』は、あり得たかもしれない「もう一つの自画像」という趣向を持つ。



- 『道草』・・・「吾輩は猫である」執筆時の生活をもとにした漱石自身の自伝であるとされる。主人公の健三は漱石、金をせびりに来る島田は漱石の養父である塩原昌之助であるという。私小説風のため、小宮豊隆からはあまり勧められないなどと書かれ、不評であった。しかし、これまで漱石のことを余裕派と呼び、その作風・作品に批判的であった、いわゆる自然主義と呼ばれる作家達からは高く評価された。主人公の健三は留学から帰った後に大学教師となる。作品の最後に「世の中に片付くなんてものは殆どない」と吐き出す。

【作品年譜(主たるもの)】

	(中・長編小説)	(短編小説・小品)	(評論・随筆)
デビュー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 吾輩は猫である (1905年1月 - 1906年8月、『ホトギス]) ・ 坊っちゃん(1906年4月、『ホトギス]) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 倫敦塔(1905年1月、『帝国文学]) 	
出世作	<ul style="list-style-type: none"> ・ 虞美人草(1907年6月 - 10月、『朝日新聞]) 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 文学論(1907年5月、大倉書店・服部書店)
前期三部作	<ul style="list-style-type: none"> ・ 三四郎(1908年9 - 12月、『朝日新聞]) ・ それから(1909年6 - 10月、『朝日新聞]) ・ 門(1910年3月 - 6月、『朝日新聞]) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文鳥(1908年6月、『大阪朝日]) ・ 夢十夜(1908年7月 - 8月、『朝日新聞]) ・ 永日小品(1909年1月 - 3月、『朝日新聞]) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 思ひ出すことなど(1910年 - 1911年、『朝日新聞])
後期三部作	<ul style="list-style-type: none"> ・ 彼岸過迄(1912年1月 - 4月、『朝日新聞]) ・ 行人(1912年12月 - 1913年11月、『朝日新聞]) ・ こゝろ(1914年4月 - 8月、『朝日新聞]) 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 私の個人主義(1914年)
			<ul style="list-style-type: none"> ・ 硝子戸の中(1915年1月 - 2月、『朝日新聞])
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道草(1915年6月 - 9月、『朝日新聞]) 		
未完の絶筆	<ul style="list-style-type: none"> ・ 明暗(1916年5月 - 12月、『朝日新聞]) 		
1916年(大正5年)12月9日、没			

